

# みどりのこえ

秋号  
2010

長野県環境保全研究所

平成22年(2010年)11月14日発行

●飯綱庁舎 〒381-0075 長野市北郷 2054-120 TEL.026-239-1031 FAX.026-239-2929  
●安茂里庁舎 〒380-0944 長野市安茂里米村 1978 TEL.026-227-0354 FAX.026-224-3415  
URL: <http://www.pref.nagano.lg.jp/xseikan/khozen/> E-mail: [kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp](mailto:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp)



コマツナギで吸蜜するオスのミヤマシジミ

## 農林技術と生物多様性

文・写真 中村 寛志

里山の生物多様性の減少が叫ばれて久しい。南箕輪村にある自宅近くの道路で駒形道と書かれた石碑付近に、コマツナギ群落を見つけた。コマツナギは私が研究している絶滅危惧種のミヤマシジミというチョウの食草である。お年寄りに聞いたところ、昔ここは林の木陰やわき水もあるので、農耕馬の休憩場所になっていたという。それでコマツナギ（駒繫ぎ）が残っていたわけがわかった。農作業を牛馬や鎌に頼っていた時代には、コマツナギは田畑の畦に生え、ミヤマシジミも絶滅危惧種ではなかった。人々がこのチョウのために食草を畦に植えたのではない。かつての農林業技術が作り出してきた環境が、結果としてミヤマシジミをはじめとする里山の生物多様性を生み出したのである。

里山の生物多様性の保全を考える上では、多様性を破壊した農薬などの農林技術を排除すればよいという単純な議論はできない。一つの方向性として、一定の区域を保護区として管理していく方法がある。伊那市ますみヶ丘にアカマツ、ヒノキに落葉広葉樹が混在する平地林と棚田がある。ほとんど人が入らず薄暗い林に

なっていたが、10年ほど前から市が憩いの森として選択的間伐、遊歩道などの整備、さらに休耕田に広葉樹の植林を始めた。昆虫類の多様性調査を実施した結果、オオムラサキやスミナガシなどのかつての里山の昆虫たちが戻り、またミヤマシジミやヒメシジミなどの絶滅危惧種も多数生息していた。

もう一つは、農林業技術の進歩が環境を変化させ多様性を喪失させたのなら、さらに新しい持続的な農林業の技術を開発し、自然と共存する農林業の場としての環境を作り上げることである。それは可能であると私は考えている。そのためには地域の人々、行政、研究、企業など社会全体が、自然との共存という理念を共通に認識することが必要になってくる。このようにして生まれた農林業技術を通して、あえて保全・保護を叫ばなくても多くの生物が共存する新しい里山の景観が創造されるのではないと思う。

(なかむらひろし/信州大学農学部教授・生物多様性  
長野県戦略策定委員会 座長)

### Contents

【巻頭言】 農業技術と生物多様性	1	【市民大集合活動報告】	9
【特集】 生物多様性をどう保全するのか	2	【こんなことやってるよ!】 活動紹介 自然観察指導員長野県連絡会	10
行政の取り組み	3	【こんな本みつけた!】 『新訂 一茶俳句集』	10
第1の危機	4	【新スタッフから】	11
第2の危機	5-6	ご案内 生物多様性地域懇談会の募集について	12
第3・第4の危機	7		
経済界の取り組み	8		